

満州開拓青少年義勇軍に参加して

埼玉県 高橋 章

昭和十三年私が小学校高等科に入学したころ、満州移民ポスター『征け若人、北満の沃野へ』が学校や役場の掲示板に張り出されていた。担任の先生からの話もあり、「満州では無肥料で十年位作物を作れる沃野で、一人に十町歩くれる。」とのことであった。

そのころ、時々義勇軍の方が現地報告と称したPRを大宮小学校で開催した。同級生の四、五人で聞きに行ったりと、服装は毛皮の防寒帽と防寒外套でなんとも頼もしい姿であった。また、満州移民の話はしきりにあり、農家の二、三男坊は進取の気性をもって義勇軍に行くのをお国のためになるのだ、とのことであった。

先に内原に入所した同級生の石川三男君より度々訓練所の一日の行事「起床から就寝まで」詳しく手紙がきた。もはや私も義勇軍になったつもりであった。

当時埼玉県では郷土部隊を編成の計画で募集したとこ

ろ、定員一個中隊約三百人に満たなく後統部隊の募集があったので、私は父母に意を決し許しをもらい、学校と役場に行き応募した。

壮途の日四月二十六日、生家に別れを告げ、村(大字)の鎮守様にて区長さんらの祝辞を、小学校校庭において村長さんをはじめ各種団体長さんの祝辞をいただき、全校生徒・青年学校生徒・消防組・青年団・国防婦人会等に壮行会をしていただいた。壮途の大旗二流、中旗二流がへんぼんと翻り、小旗を揚げ音楽隊の吹奏に送られて、我々は肩をいからし、長蛇の列でチンチン電車の停留所に向かう。穂をはらんだ麦風は実に心地良かった。見送りの方にお礼を述べ乗車、「神山章君万歳」の小杉校長の音頭で村の方々と別れを告げる。

大宮町の社会館に一夜を明かし、翌日氷川神社を参拝し、大宮小学校校庭において初野校長の訓示を受け、大宮駅にて見送りの方々と別れを告げた。その日の午後内原訓練所に入所した。場所は茨城県東茨城郡下中妻村内原、満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所第一大隊第六中隊第一小隊であった。

その日は、中野中隊長その他の幹部先生と青柳小隊長から話があった。宿舎は日輪兵舎というバラック造りであったが頼もしい質素なものだと思った。

一応の内地訓練を終了し六月十五日大宮と浦和の郷土訪問をして、埼玉会館で県の壮行会をしていただき六月二十二日内原出発。東京駅前を行進のあと宮城遙拝をし、父母との最後の面会をした。そして、伊勢神宮に参拝し敦賀港より出航、清津寄港、羅津港上陸、船は気比丸であった。

大陸の広々とした風景を見ていると列車の走りは悠然としているように思えた。六月二十七日夕刻、ハルビン郊外三果樹（信号所）下車、徒歩で浜江省哈爾濱市、滿州開拓青年義勇隊哈爾濱特別訓練所第六中隊として入所。ここで三か年の現地訓練を受け、昭和十八年二月東安省虎林県小七虎林地区五十鈴義勇隊開拓団として入植、虎林街より西方六十キロ位の所であった。

いよいよ出発となりました。一か月もたてば日本に帰れると思っていたのが、治安の關係、鉄道の混乱などのため七か月後に連雲港にたどりつきました。その間、副

食物の調達炊事、風呂、トイレ等の設営など大変な苦勞でした。特に副食物の調達に各人の持ち金も日増しに減少し、栄養にも影響をもたらすようになったが、何とか出港地連雲に着きました。その時は毛布まで手ばなす者もおりました。

私たちは早速開封民団事務所を開設し、乗船名簿日本文一通、英文一通を作り当局に交渉したがはかばかしくないので、協議の結果、日本刀の供出を呼びかけたところ七、八振集まったので、それを手みやげに再交渉したら順調に事務が進み、昭和二十一年三月二十一日乗船、三月二十五日佐世保に上陸できました。

この七か月のみちすがら痛切に感じたことは、中国軍人や住民の襲撃やいやがらせは全く無かったことであります。かえって、宿泊などの設営には、二百人ももの団体が散在せずにか所にまとまって宿泊できる建物を提供してくれたりして温かい接遇を受けました。引き揚げの苦勞は忘れても、この心温まる接遇は忘れることができないう追憶となるでしょう。